競争原理と進歩、その弊害

黒田インターナショナル　コンサルティング
黒田　毅

競争を有する社会は、アメリカに代表され、その栄冠を賞賛する社会風土を有する。これらは時代進歩性を行うことにおいて現実における優れた現実を自己に与えるのである。他方において社会底辺における現実を与え、これらは完全な社会の２分化を有する。時代先端性を牽引する国家であるアメリカは、その優秀な人材が、全ての分野において国家をリードするのであるが、教育機会の貧しさにおける他方における社会的弱者を与えるものである。これらは競争とそのエリートへの憧憬が、教育や社会の原動力として存在することにおける国家運営が存在するのである。他方においては、これらは対立の構造なのである。また２極化という現実なのである。日本国という現実は、単一性と協調における社会を風土とする。これらは世界の統一性の構築が、それらの融和を求めるとき、日本国がそれを行うことができるという現実を与えるものである。これらが社会の２分化と対立を得ないという現実がそれを可能とするのである。絶対的な進歩性は、明らかに社会の向上であり、未来という現実である。しかしこれらはエリートたちにおける占有が世界を形成する。競争現実格差を創造する。これらは新社会主義的合意が全ての人々への生活の供与を実現することを提案する。対立の構造は必ず対話における解決を必要とするのである。憎しみは唯一愛における解決を与える。もし世界が、最も豊かな人と貧しい人への疑問を平等という合意において解決できるならば、世界は問題を解決できるかもしれない。また苦しみのない世界の創造は、一切の不和という現実の解決を要求するものである。これらは岸田日本国首相が提案する新資本主義への素朴な提案として、提示したい。